感染症発生動向調査委員会報告　5月

≪今月のトピックス≫

- **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、過去5年間で最も高い水準で、注意が必要です。**
- **麻しん報告数は第20週から減少傾向がみられています。緊急対策として、未接種･未り患者への市費による予防接種(任意接種)を実施中です。**
- **腸管出血性大腸菌感染症は、5月としては過去5年間で最も多く、注意が必要です。**

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：88か所、内科定点：57か所、眼科定点：18か所、性感染症定点：26か所、基幹（病院）定点：3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成20年4月21日から平成20年5月25日まで（平成20年第17週から第21週まで。ただし、性感染症については平成20年4月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成 20 年　週－月日対照表

第 17 週	4 月 21～27 日
第 18 週	4 月 28～ 5 月 4 日
第 19 週	5 月　5～11 日
第 20 週	5 月 12～18 日
第 21 週	5 月 19～25 日

全数把握の対象

＜麻しん＞

1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。（国立感染症研究所ホームページ http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html）

横浜市では、第21週(5/19～25)までの報告数は1316例で、全国の報告数8435の15.6%と、人口に比して非常に多くなっています。年齢別では10代が過半数を占めています。また、約半数が予防接種未接種でした。

5月1日～25日までの報告数は、176例と、2月304例、3月371例、4月317例に比べて少なくなっていますが、昨年は5月から6月にかけて流行しており、引き続き注意が必要です。

2012年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

横浜市では、緊急対策として、未接種･未り患者への市費による予防接種(任意接種)を実施しています。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/oshirase/mr-kinkyu.html

1歳～高校3年生に相当する年齢の未接種･未り患者は、この機会に早めに接種していただくことが重要です。

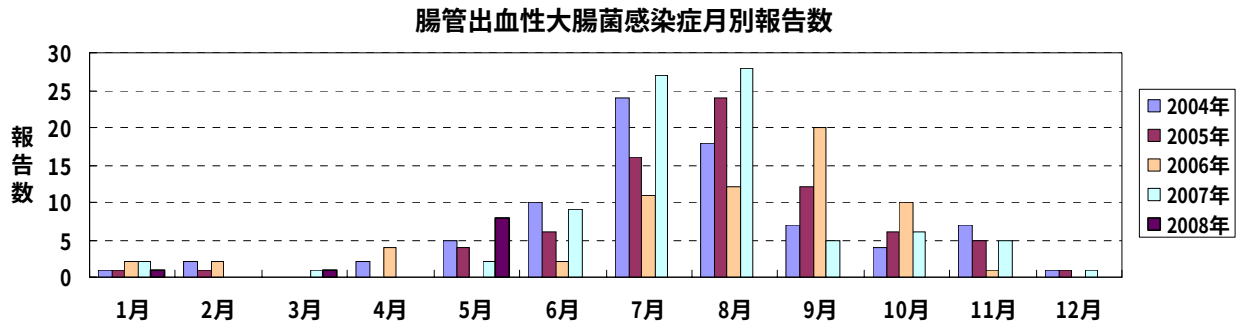
横浜市の詳細については、「横浜市における麻しん患者届出状況(2008年)」
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/measles/measles.html をご覧ください。

《日本は、2008年～20012年の5年間で、麻疹排除を目指します》

① 風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握。
② 1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底。
③ 5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施。

＜腸管出血性大腸菌感染症＞

5月の報告数は、29日現在で8例と、過去5年間でもっとも多くなっています。年齢の内訳は、10歳未満が1例、10代が1例、20代が1例、30代が2例、40代が1例、50代が1例、60代以上が1例でした。毎年、夏に報告が多くなりますので、注意が必要です。例年レバ刺し生食による感染が見られます。



啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf

定点把握の対象

＜A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞

第2週以降増加傾向が続き、第12週から第16週にかけてやや減少したものの、第20週は定点あたり3.15と、この時期としては過去6年間でもっとも高い値となりました。第21週も3.11と高い値が続いています。行政区別では、港北区(9.29)、緑区(8.00)、瀬谷区(6.50)に多くみられました。川崎市は3.61、神奈川県(横浜、川崎を除く)は3.36と、どちらも横浜市より高い値です。全国は3.02でした。今後も注意が必要です。

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の発生情報」

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/gas/2008/gas0502.pdf もあわせてご覧ください。

＜感染性胃腸炎＞

年末にかけて多く報告され、1月以降は横ばいが続いていましたが、第8週からは増加し、第11週は定点あたり13.56と過去5年間と比べて最も高い値になりました。横浜市では、第12週以降は減少し、第21週には定点あたり5.55と例年よりやや高めの水準になりました。行政区別では、中区(15.00)、旭区(10.50)に多くみられました。川崎市は8.36とかなり高く、神奈川県(横浜、川崎を除く)は6.90、全国は7.02と、いずれも横浜市より高い値でした。今後の動向に注意する必要があります。

学校等における集団発生もあるため、職員の健康管理についても、十分注意を払う必要があります。

＜水痘＞

第19週、第20週と増加しましたが、第21週は少し減少して定点あたり1.39でした。川崎市は2.00と横浜市より高く、神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.29でした。

＜手足口病＞

第21週は定点あたり0.17で、まだ増加の兆しは見られません。しかし、5月に中国で手足口病の流行が見られており、例年夏にかけて増加してくることから、今後注意が必要です。

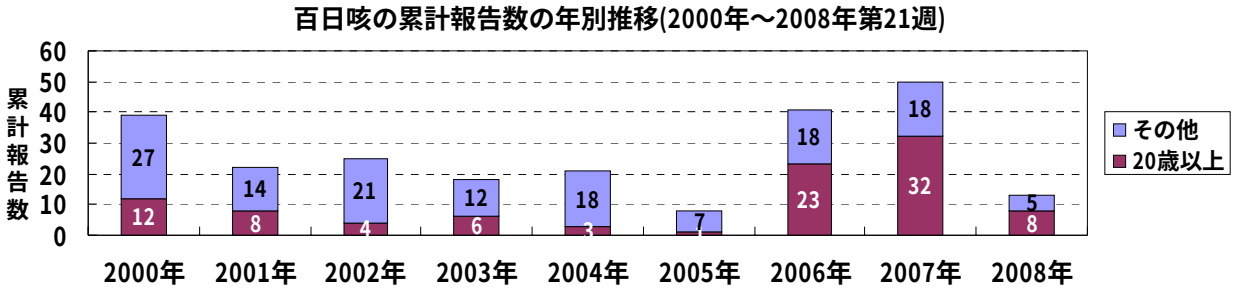
中国での手足口病の流行について

(英文：WHO Disease Outbreak News http://www.who.int/csr/don/en)

＜百日咳＞

第17～21週の報告は7人で、そのうち5人が20歳以上でした。全国的には例年より高めの水準が続いており、成人の報告例が多くなっています。

成人では、長期の咳または発作性の咳だけのことが多く、他の疾患との鑑別が困難なために診断が遅れ、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、特に、生後6か月以下では重症化する危険性があります。早期の予防接種が必要です。（三種混合ワクチンとして、生後3か月から接種できます。）



＜ヘルパンギーナ＞

第21週は定点あたり0.17と、少し増加の兆しが見られます。全国では0.37と横浜市より高い値でした。例年、6月に入り急に増加してくるため、これからの季節は注意が必要です。

＜性感染症＞

性感染症は、診療科でみると産婦人科系（産婦）の11定点、および泌尿器科・皮膚科系（泌・皮）の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

4月は、3月に比べて、横ばいもしくは減少傾向です。15～19歳の若年については、男性は報告がありませんでしたが、女性は性器クラミジア感染症と性器ヘルペスウイルス感染症で1例ずつ見られました。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ（内科）定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹（病院）定点：3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

＜ウイルス検査＞

2008年5月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点は28件（鼻咽頭ぬぐい液）、眼科定点は1件（眼脂）、基幹定点は11件（咽頭ぬぐい液4件、血清3件、髄液、便、血液、血漿各1件）でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎26人、胃腸炎1人、発疹1人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、基幹定点は高CK血症2人、脳炎1人、咽頭扁桃炎1人、薬剤性過敏性症候群1人でした。

6月10日現在、小児科定点の気道炎患者1人からアデノウイルス2型が分離されています。

これ以外にPCR検査では、小児科定点の気道炎患者3人からヒトメタニューモウイルスの遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

＜細菌検査＞

5月の感染性胃腸炎関係の受付は10菌株で起因菌は検出されませんでした。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は5件でA群溶血性レンサ球菌が3件から検出されました。

【 感染症・疫学情報課　検査研究課（細菌担当・ウイルス担当） 】